2020 年沖縄シンポジウム
「琉球の島々から
日本の行く末を見据える」

開催日時：令和 4 年 3 月 13 日（日）13 時～17 時 30 分

開催場所：ホテルロイヤルオリオン

主　　催

一般社団法人全国日本学士会

共　　催

一般社団法人全国日本学士会沖縄支部

後　　援

沖縄メディカルグループ、琉球大学

沖縄国際大学、沖縄大学、名桜大学

【企画の趣旨】

温暖化による気候変動に象徴される地球環境の劣化は、新型コロナウイルス感染のパンデミック下においてもとどまることがありません。世界的に金融資本主義のもとに地球を消費し尽す流れに歯止めがかかりません。大量にお金や物を動かすこれまでの流れを、小さな地域で資源やお金が循環する方向への転換が求められています。世界のなかで、離島ともいえる日本が身の丈に合った生き方を顧みず、未だに背伸びの無理を重ねる先に、続く世代が幸せに生きる確かな未来はありません。そうした中で多くの島々からなる琉球列島は、その地理的位置や大陸とのつながりの歴史、第二次世界大戦前後の苦難の歴史のなかで、賢く生きる知恵や技に満ちた文化が根付いている場所だと思われます。

全国日本学士会のなかで沖縄には支部が存在し、地道な活動が続けられています。沖縄支部の協力を得て、シンポジウムを当地で開催する運びとなりました。

このままでは地球生命系が破綻することがますます明白になるにもかかわらず、今なお目先の経済成長の呪縛から抜け出せず、行く末を見失いつつあるこの国を、多様な自然・歴史・文化を土台に“自足”の道を歩む琉球列島の島々の取り組みから学び、未来を見据えるシンポジウムを企画しました。

令和４年３月 13 日

2022 年沖縄シンポジウム
「琉球の島々から日本の行く末を見据える」実行委員会

委員長　田中　克：一般社団法人全国日本学士会常務理事
舞根森里海研究所所長、京都大学名誉教授

一般社団法人全国日本学士会
２０２２年沖縄シンポジウム

「琉球の島々から日本の行く末を見据える」

開催日時 ： 令和４年３月１３日（日）１３時～１７時３０分
開催場所 ： ホテルロイヤルオリオン（〒902-0067 那覇市安里１丁目 2–21）

Ⅰ　主催者挨拶（13 時～13 時 05 分）

Ⅱ　趣旨説明（13 時 05 分～13 時 15 分）
京都大学名誉教授・全国日本学士会理事　　田　中　　克

Ⅲ　基調講演（13 時 15 分～13 時 55 分）
「南シナ海の島々から」　　海洋冒険家　　八　幡　　暁

Ⅳ　パネル討論（13 時 55 分～16 時 00 分）
（コーディネーター : 地球村研究室代表社員・東北大学名誉教授　　石　田　秀　輝）

話題提供１　「宮古島から」（13 時 55 分～14 時 15 分）
琉球大学島嶼地域科学研究所講師　　山　極　海　嗣

話題提供２　「与論島から」（14 時 15 分～14 時 35 分）
琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科准教授　　高　橋　そ　よ

話題提供３　「久米島から」（14 時 35 分～14 時 55 分）
NPO 法人ガイア・イニシアティブ代表　　野　中　ともよ

（休　　憩）

話題提供４　「沖永良部島から」（15 時 05 分～15 時 35 分）
oldie-village 代表　　古　村　英次郎

話題提供５　「サンゴ礁の島々から」（15 時 35 分～15 時 55 分）
東京経済大学経済学部准教授　　大久保　奈　弥

Ⅳ　総合討論（16 時 00 分～17 時 30 分）

共　催 : 一般社団法人全国日本学士会沖縄支部
後　援 : 沖縄メディカルグループ、琉球大学、沖縄国際大学、沖縄大学、名桜大学

講　演　者　等

「プ ロ フ ィ ー ル」

「講　演　要　旨」

【趣旨説明】

田　中　　克　氏：京都大学名誉教授、舞根森里海研究所所長
一般社団法人全国日本学士会常務理事

【コーディネーター】

石　田　秀　輝　氏：一般社団法人サステナブル経営推進機構理事長
地球村研究室代表・東北大学名誉教授

【基調講演】

八　幡　　暁　氏：海洋冒険家

【話題提供】

山　極　海　嗣　氏：琉球大学島嶼地域科学研究所専任講師
高　橋　そ　よ　氏：琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科准教授
野　中　ともよ　氏：NPO 法人ガイア・イニシアティブ代表
古　村　英次郎　氏：oldie-village 代表
大久保　奈　弥　氏：東京経済大学経済学部准教授

趣 旨 説 明

田　中　　克　氏

京都大学名誉教授
一般社団法人全国日本学士会常務理事
舞根森里海研究所所長

【プロフィール】

1943 年滋賀県大津市生まれ。1971 年京都大学農学研究科博士課程修了。

水産庁西海区水産研究所や京都大学農学研究科における稚魚の生活史研究を通じて、森と海の不可分のつながりに気付く。森から海までの多様なつながりの再生に関する統合学「森里海連環学」を 2003 年に提唱し、先行する社会運動「森は海の恋人」との協同を進める。森と海をつなぐ干潟や湿地などの“あいだ”の再生を有明海と三陸沿岸域を中心に取り組む。

2011 年より、幸せの原点を探るシーカヤックにより日本の沿岸漁村をめぐる「海遍路」に参加。2021 年は、“里”（人の営み）のありようを求める、「森里海を結ぶフォーラム」を立ち上げ、代表を務める。

著書に『森里海連環学への道』（旬報社、2008）、『いのち輝く有明海を－分断・対立を超えて協働の未来選択へ』（花乱社、2019 年）、『いのちの循環「森里海」の現場から－未来世代へのメッセージ 72』（花乱社、2022 年）など。

コーディネーター

石　田　秀　輝　氏

一般社団法人サステナブル経営推進機構理事長
地球村研究室代表・酔庵塾塾長
東北大学名誉教授・京都大学特任教授・星槎大学特任教授

【プロフィール】

2004 年㈱INAX（現 LIXIL）取締役 CTO(最高技術責任者)を経て東北大学大学院環境科学研究科教授、ものつくりとライフスタイルのパラダイムシフトに向けて国内外で多くの発信を続けている。

特に、2004 年からは、自然のすごさを賢く活かすあたらしいものつくり『ネイチャー･テクノロジー』を提唱、2014 年から『心豊かな暮らし方』の上位概念である『間抜けの研究』を鹿児島県沖永良部島へ移住、開始した。

近著：「危機の時代こそ　心豊かに暮らしたい！」（KK ロングセラーズ 2021）「バックキャスト思考で行こう！」（ワニブックス 2020）、「人間の役に立っている ありがた～い生き物たち」（リベラル社 2019）「Nature Tech. &　Lifestyle」（Stanford Pub.2019）ほか多数。

八　幡　　暁　氏

冒　険　家

【プロフィール】

1974 年東京都生れ。大学時代より海に目覚め、八丈島で素潜り漁をはじめる。卒業後は各地の漁師の仕事を学びながら国内外を巡る。

旅の途中でシーカヤックと出会い、2002 年から「海と共に暮らす人々は、どのように生きているのか」をテーマに、 オーストラリアから日本までの多島海域を舞台にした人力航海の旅「グレートシーマンプロジェクト」をスタート。

フィリピン - 台湾海峡横断（バシー海峡 07 年）など、世界初となる航海記録を複数持つ。

2005 年から、既存の枠を越 える価値を生み出す体験型のツアー会社「手漕屋素潜店ちゅらねしあ」の代表としてもチャレンジを続けている。

2010 年より、日本の海の現場へ、海から人力移動しながら訪れ、現場の声を聞く活動「海遍路」を開始。

2014 年には、首都圏にも拠点を置き、都会暮らしの人々を対象に、人の野生のスイッチを発動させる仕組み と、人材育成の取り組みを開始させる。

一般社団法人そっかでは、「足下で遊ぶ、作る、食べる」をテーマに、都市型地域コミュニティー作りをしている。

【講 演 要 旨】

基調講演　「南シナ海の島々から」

「海で人はどのように暮らしているのか」学生だった私を海に向かわせたのは、そうした疑問が生まれたからでした。当時、我が家の暮らしを成り立たせているのはお金。そこに疑いはありません。電気、ガス、水道、生活のインフラも、お金によって賄っているという認識です。

学校では、環境問題や資源の枯渇の話は聞いているにも関わらず、その知識は、テストの穴を埋めるための情報でしかありませんでした。人口減少に歯止めがかからない今、それは地域課題ではなく現象である。

その制約を受け止めながら離島のメリットを最大限に発揮して、心豊かな島つくりの現場をお話しします。

山　極　海　嗣　氏

琉球大学島嶼地域科学研究所専任講師

【プロフィール】

琉球大学人文社会科学研究科比較地域文化専攻修了・博士（学術）。琉球大学戦略的研究プロジェクトセンター特命助教、日本学術振興会特別研究員（兼・国立民族学博物館外来研究員）を経て、現在は琉球大学島嶼地域科学研究所専任講師。専門は先史考古学・人類学。

琉球列島南西部の南琉球地域（先島諸島や宮古・八重山諸島）を中心に、台湾・フィリピン・ミクロネシア等もフィールドに考古学的調査を行っており、初期の人類が島や海の世界へ進出した背景や要因、そこでの環境適応プロセスや文化が多様化するメカニズムについて研究している。

主な著作に「海を渡り、島を移動して生きた最初期の「海民的」人びと」（小野林太郎ほか（編）『海民の移動誌：西太平洋のネットワーク社会』昭和堂、2018 年に収録）や、「オセアニアの「貝斧」と「石斧」：人の行動の柔軟性と多様性」（秋道智彌・印東道子（編）『ヒトはなぜ海を越えたか―オセアニア考古学の挑戦―』雄山閣、2020 年に収録）など。

【講 演 要 旨】

話題提供１　「宮古島から」

－宮古島の人類史からみる島嶼地域における文化的多様性とその背景－

比較的小さな島々から構成され大陸部などの陸域とは海を隔てる島嶼地域は、近代国家の枠組みではしばしば辺境やマイノリティに位置づけられやすい。一方で、島嶼ではしばしばその地域性の高い文化や社会が展開することでも知られる。沖縄を含む琉球列島もそういった地域独自の文化や社会が展開した地域であり、その多くは観光資源としても重要なものとなっている。

一方で、島嶼はその地域の中においても文化的あるいは社会的な多様性が展開した地域でもある。例えば、琉球列島の宮古島で展開した歴史や文化は必ずしも「沖縄」や「琉球」といった一つの特徴では括ることのできない地域特有の物であった。近年、宮古島では人類の痕跡が 3 万年前にまで遡ることが示されているが、このような過去の人類痕跡からは宮古島の人々が非常に古い段階から独自色の強い文化を営んでいたことが読み取れる。そして、宮古島という島嶼で展開した独特な人類史は現代の琉球列島における人や文化の多様性へも繋がった。本論では宮古島の人類史を例に「なぜ島嶼に独自で多様な文化や社会が展開するのか」にアプローチすることで、多様な人・社会が共生する世界を理解し、今後のより良い展開を考える議論へと繋げたい。

高　橋　そ　よ　氏

琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科准教授

【プロフィール】

琉球大学　人文社会学部 琉球アジア文化学科　准教授

博士（人間・環境学）、専門：生態人類学・環境民俗学。島をフィールドとした人類学的研究に憧れて、北海道から琉球大学に入学し、伊良部島の素潜り漁師に弟子入りをする。京都大学大学院人間・環境学研究科修了後、米国・東西センターの客員研究員、野生動植物の国際取引をモニタリングする国際NGO トラフィックのプログラムオフィサー、琉球大学研究推進機構研究企画室リサーチ・アドミニストレーターなどを経て、現職。琉球列島各地で、地域の方々と一緒にサンゴ礁と人との関わりをめぐる生活誌の記録に取り組んでいる。著書に『沖縄・素潜り漁師の社会誌―サンゴ礁資源利用と島嶼コミュニティの生存基盤』（コモンズ）など。

【講 演 要 旨】

話題提供２　「与論島から」

本発表では、自然と人間との循環的なかかわりと、その関係性の回復からコミュニティ・ケイパビリティの向上を試みる協働研究の一端を紹介する。

琉球弧の島々は高島と低島に分類され、それぞれの自然特性や歴史性に応じた固有の言語や文化、在来的な知識や技術を発達させてきた。本発表では、人間活動の生存基盤となる生物相と文化の相互作用を「生物文化多様性」ととらえ、生きものや環境、人間活動などの諸相がどのように影響を及ぼしあってきたのかを考えたい。報告者は、経済的価値は小さいが、生業の場として利用されてきた礁池や干潟などの陸と海をつなぐ「はざま」生態系に着目し、生物文化多様性を支える在来知と生存基盤の解明に取り組んできた。高度経済成長期によって加速した産業構造の変化や農地開発、過疎化、後継者不足の影響を受け、島の自然と暮らしの関わりは大きく変容してきた。このような変化によって危機に立たされているのは、自然環境や生物多様性だけではない。自然と共に生きる知恵によって育まれてきた生物文化多様性や、その恵みへの感謝を表現し、分かちあうためのことばやうた、自然認識や感性、技術やわざ、すなわち文化の継承そのものでもある。生物文化多様性の損失とは、人間らしく豊かに暮らす well-being の保障の危機だといえるだろう。

本発表では、鹿児島県と沖縄県の境界の島である与論島を事例に、生物文化多様性が育む在来知を次世代へ持続的に受け継いでいくための参加型コミュニケーションデザインについて考えたい。本発表では、報告者が地域の方々と取り組んでいる、１）コロナアーカイブ、２）小規模漁業（トビウオ漁）の映像製作、３）古写真調査モデルの開発と実践展開を紹介する。そこから、自然と人間との循環的なかかわりによって醸成されるコミュニティ・ケイパビリティの可能性について検討する。

野　中　ともよ　氏

NPO ガイアイニシアティブ代表

【プロフィール】

NHK、テレビ東京等で、数々の番組キャスターを務め国際社会の動向を前線から伝えるジャーナリストとして活躍。アサヒビールなどの企業役員を歴任後、三洋電機会長を務め、”いのち”を軸にした環境負荷の低い商品こそがグローバルマーケットを制する鍵であるとし、卓越した経営手腕を示した。2007 年 NPO 法人を立ち上げ、人間も地球という生命体 GAIA の一員として振る舞うべきことを説く。

財政制度審議会、法制審議会、中央教育審議会、沖縄振興審議会委員、内閣構造改革特別区域推進本部教育評価委員長などを歴任。

中部大学客員教授。ローマクラブ正会員。

全国日本学士会「2018 年度アカデミア賞社会部門」受賞。

【講 演 要 旨】

話題提供３　「久米島から」

いのちを繋ぐ豊かな未来は、水、土、エネルギーにある。
沖縄の離島の成功は、日本や地球の未来を拓きます。
地球は宇宙の小さな離島でしかないのですから。
海洋温度差発電（OTEC）をはじめとする「いのち輝く島づくり」
久米島の実証はいかに・・・？

古　村　英次郎　氏

Oldie-village 代表

【プロフィール】

昭和 52 年 11 月 7 日生　沖永良部島生まれ

中京大学体育学部卒業後単身オーストラリアへ

PADI インストラクターとしてケアンズで勤務

帰国後海外旅行専門の旅行会社にて勤務

長女の出産を機に沖永良部島へ U ターン

地元の旅行・運送会社で勤務

平成 25 年度より現職沖永良部島観光連盟事務局長

平成 27 年一般社団法人おきのえらぶ島観光協会初代事務局長

令和 3 年 5 月末日　退任

令和 3 年 10 月　観光庁周遊観光促進のための専門家に登録

【講 演 要 旨】

話題提供４　「沖永良部島から」

Island Plus ～アイランドプラス離島の概念を覆す～

人口減少に歯止めがかからない今、それは地域課題ではなく現象である。

その制約を受け止めながら離島のメリットを最大限に発揮して、心豊かな島つくりの現場をお話しします。

大久保　奈　弥　氏

東京経済大学経済学部准教授

【プロフィール】

1976 年生まれ、横浜市出身。立教大学文学部を卒業後、東京水産大学（現・東京海洋大学）大学院資源育成学専攻にて修士（水産学）、東京工業大学大学院生命理工学研究科で博士（理学）を取得。日本学術振興会特別研究員ＰＤ（京都大学・オーストラリア国立大学）、慶應義塾大学自然科学教育研究センター特任助教を経て、東京経済大学全学共通教育センター准教授（2022 年 4 月より教授）。サンゴ（イシサンゴ目）の発生様式が 2 つに分かれることを初めて発見し、新たな亜目の提唱を行うなど、サンゴの発生や組織に関する基礎生物学的な研究に加え、鎌倉市材木座や逗子市小坪大崎に生息する生物の調査など、生物リスト作成を通した沿岸環境の保全活動、サンゴ移植や植え付けにおける社会実装について様々な提案をおこなってきた。現在、日本環境会議理事、一般社団法人日本生態学会自然保護専門委員会副委員長。自宅でサンゴを飼育しており、生まれたサンゴの赤ちゃんを育てている。

【講 演 要 旨】

話題提供５「サンゴ礁の島々から」

東京経済大学でサンゴの研究？と不思議に思われることが多いのですが、自宅にはサンゴ水槽や蛍光顕微鏡等の実験機材を沢山揃えた部屋があり、リベラルな大学の一般教養で素晴らしい同僚に囲まれ、研究教育生活を送っています。

私は横浜生まれですが、高校までは毎週末に山へ連れていかれ、夏にはテレビもクーラーもない長野県小川村の空き家で過ごしました。当時は田んぼに農薬を使っていなかったので、夜になると家の周りにホタルが乱舞して、まるでおとぎの国のようでした。両親のそんな情操教育の結果、自然の大好きな子供となり、小学生の頃から本格的に生き物を飼育するようになりました。大学は文学部ドイツ文学科に入りましたが、一般教養で生態学の授業を受けたのがきっかけで、やはり海洋生物の研究がしたいと思い、大学４ 年生で人生初の受験勉強を行い、運よく試験に合格し、東京水産大学（今の東京海洋大学）の大学院へ進むことができました。指導者は大森信先生といって、移植などサンゴの増殖研究のパイオニアです。先生が当時私に与えたテーマが「無性生殖を利用したサンゴ増殖のための移植（以下、植え付けも移植とする）」でした。慶良間諸島阿嘉島にあった研究所に２ヶ月おきに滞在し、ハンマーやトンカチなど沢山の道具を持って海へ入り、サンゴの移植をひたすら行うのです。毎年サンゴの産卵期には、毎晩一人で夜中に潜って、移植した 1000 本あまりのサンゴの産卵の有無をチェックしました。2000 年には移植したサンゴの産卵を世界で初め

て観察し、2001 年には今のサンゴ礁学会や沖縄県のサンゴ移植マニュアルの元になった論文を私と恩師で出しました。しかし、研究をするうちに気づいたのは、移植が両刃の剣になるということです。研究者や公共事業を行う業者や行政は、移植の成功例のみ表に出し、失敗例は出しません。その結果、移植サンゴの長期の生存率が実際には 1～ 3 割であっても、移植さえすればサンゴが育つという幻想が市民に与えられてしまい、ひいてはサンゴの移植がさんご礁生態系を破壊する際の免罪符として利用されるようになりました。矛盾を感じた私は、修士を終え、東京工業大学の本川達雄研究室に入り、移植したサンゴの繁殖研究で理学博士号を取得した後、移植実験をやめ、サンゴの移植に関する誤解を解くための論考を科学誌や一般誌に書くようになりました。サンゴの移植はあくまでも「養殖」です。皆さんの想像するようなサンゴ礁生態系そのものを再生することはできません。近年では、移植が環境教育に効果的だと言う研究者もいますが、主目的において効果がないものを副次的効果に基づいて正当化するのは持続的な保全手段とは言えません。それでも移植の楽しさを環境教育に利用したいのならば、移植で死亡した数多くのサンゴを参加者に見せ、生態系再生の難しさを明示し、だから今あるサンゴの保全が必要なのだと結論づけるべきでしょう。科学的知見に基づいたエコツアーは他社との差別化を図れます。

行政や研究者は白化のことばかり叫んでいますが、沖縄でさんご礁生態系を破壊しているのは我々人間です。その現実から目をそらさず、さんご礁生態系の保全が経済的にも持続可能になるような、科学的知見に基づいた仕組みづくりについて、皆さんとアイディアを出し合って議論できることを楽しみにしています。

【メ　モ】

アンケートのお願い

本日は、2022 年沖縄シンポジウム「琉球の島々から日本の行く末を見据える」にご参加いただきありがとうございました。

本シンポジウムの内容は、本会機関紙「会誌 ACADEMIA」 2022 年 4 月号 №186 に掲載し、広く配布いたします。

また、本日のシンポジウムに参加された皆様方のご感想、ご意見等も合わせて掲載いたしたく、ついては、裏面にご自由にご記入いただければ幸いです。

なお、会誌への掲載を望まれない方は、その旨記載願います。

おって、会誌をご希望の方は、お送り先をご記入いただければ、無料にてお送りいたします。

ア　ン　ケ　ー　ト

会誌の送付を、□希望する。　□希望しない。
　希望される場合は、送付先をご記入願います。
　　住所：〒
　　宛先：

よろしければ、ご記入願います。

・性　別：□女性　　□男性
・年　齢：□２０歳代　□３０歳代　□４０歳代　□５０歳代　□６０歳代　□７０歳以上
・住まい：□那覇市内　　□沖縄県（　　）　　□その他（　　）

本シンポジウムの開催を何でお知りになりましたか
　□チラシ　　□知人　　□新聞　　□HP　　□その他（　　）

○本日のシンポジウムの感想、意見、参加された動機等をご自由にお書き下さい。
（□ 本会会誌への掲載を望まれない方は、□内にチェックを入れてください。）

※ご協力ありがとうございました。